

想いをつないで、花は咲く。

～ごんぎつねの里に咲く 300 万本の彼岸花～

秋になると矢勝川沿いを真っ赤に染める彼岸花。

半田を代表する秋の風景として、全国から多くの人が訪れます。

しかし、この景色は自然にできたものではありません。

童話「ごんぎつね」への愛着と、地域の人々の長年の活動が今の美しい風景をつくりあげています。



ごんぎつねの一節から始まった物語

「おひるがすぎると、ごんは、村の墓地へいって、六地藏さんのかげにかくれていました。

いいお天気で、遠く向こうにはお城の屋根瓦が光っています。

墓地には、ひがん花が、赤い布のようにさきつづいていました。」



—「ごんぎつね」より

童話作家・新美南吉の代表作「ごんぎつね」

作品の中にある「ひがん花が、赤い布のようにさきつづいて」

という一節に描かれた風景を実際にこの地で再現したい——。

そんな地域の一人の想いから、彼岸花の植栽活動が始まりました。

最初に彼岸花の植栽をはじめたのは、半田市岩滑に生まれ育ち、
新美南吉顕彰会おぐりだいぞうの広報部長だった小栗大造さん。

小栗さんは、ある時ふと思ひ立ち、童話「ごんぎつね」の一節の
「ひがん花が、赤い布のようにさきつづいて」いる風景を、南吉が
よく散歩した矢勝川の堤につくろう、と活動を始めました。

一人から始まった植栽は、やがて岩滑の人々へ、子どもたちへ、地
域の企業や行政へと広がっていきました。

現在の約300万本にまで拡大した彼岸花の風景は、地域の人の
手と想いによって守り受け継がれてきたものです。



▲最初に彼岸花の植栽を一人で始めた 小栗 大造さん